



これほど完璧なインスタレーションにお目にかかったことはない。ドイツの女性アーティスト、ウテ・ザイフェルトのステップス初個展である。ウテは搬入と飾り付けに5日間を費やしたという。映像、オブジェ、絵画、影という4つの要素で構成されるインスタレーションは、ステップスギャラリーのサイズどころか梁、扉、エアコン、エアコンのパイプに至る細部にまで対応している。壁面の使い方、オブジェの高さ、映像の大きさは、全く隙がないにも関わらず息苦しくない。それどころか、反って開放感すらも生まれている。それはウテが、ステップスギャラリーが銀座のビルの5階にあることを意識する証拠だ。

作品を考察するのに素材と動機と時代性は欠かせないが、ウテの作品を見ると、総ての素材が人間の創作物であることになる。動機は人類であることが明白となる。私は「新かながわ」の展評で2011年の横浜トリエンナーレを電気=原発を前提とした「ユートピア以後の世界観」と酷評したが、ウテの場合は正にM・フーコーの言う「人間の終焉」以後の世界観を感じる。人間は愚かな営みによって自らを消滅させても、その良心だけが実体のないまま漂っている姿を想起させる。総てが終わったのではない。人間は始まってもないのかも知れないという問いを突きつけられた。ウテの思想は僅かな紙片にも描かれている。

